

OPEN THE DOOR！～明日に向かって！～

－障がいのある人たちと舞台表現を楽しんだ 21 年－

NPO いちぶんネット代表理事
劇作・演出 市民文化プロデューサー
吉原 廣

「面白いかも！」を推してくれた補助金

2002 年 8 月、子どもからお年寄りまでの三世代市民出演者 300 人で創る「いちかわ市民ミュージカル（略称・いちミュ）」が初めて上演された。“我が街いちかわ（千葉県市川市）”の文化や歴史、事件にこだわってミュージカル化しようという創造姿勢とその舞台成果が圧倒的な評判を呼んで、以後隔年開催で今日まで継承され、現在 2026 年 10 月の第 12 回公演に向けて準備中だ。

それを機に、「我が街いちかわ」に新しい市民文化の花を咲かせよう！」と、実行委員有志で NPO 法人いちかわ市民文化ネットワーク（略称・いちぶんネット）が結成され、私が代表理事に就任した。

「いちミュ」の初演を観ていたある親から、「我が子には障がいがあるが、そういう子どもらにも楽しいミュージカル体験をやらせたい」との声が届いた。「障がいのある人たちで創るミュージカルなんて大変!?・・・でも面白いかも！」と始めたのが「チャレンジド・ミュージカル（略称・チャレミュ）」だ。

私の周りに障がいのある人たちとの接点はなかった。そもそも「障がいとは何か？」と考えたこともなかった。ダウン症児や肢体不自由な人たちを思い浮かべ、「そういう人たちで歌ったり踊ったり演技したりするのも楽しいかも！」と軽く考えたに過ぎない。

唯一つだけ条件を付けた。「稽古時間もスタッフやサポーターの数も半端では済まないだろう。補助金ももらえたら取り組みよう！」。それが戴けた。福祉医療機構から 250 万円も。この補助金があれば、これから報告する一連の事業は生まれなかったかもしれない。感謝。

「ハクナマタタ！～だいじょうぶだよ！」

2005 年 12 月、障がいのある人もない人も、子どもも大人も、一緒に創る・楽しむチャレンジド・ミュージカル第 1 回公演「ハクナマタタ！～だいじょうぶだよ！」の開演。舞台には出演者 150 人、客席には満員 800 人の 2 ステージ。その半分近くがいわゆる障がいのある子どもや青年たちで、会場には異様な興奮がみなぎった。



▲ 開演前の表情 「歌舞伎迷作面白双六」 2019 年

稽古中に心掛けたこと。まずは、心身のどこかに障がいがあって筋肉も凝り固まっているだろう出演者たちにどんな動きができるのか？ どんな表現に楽しみと喜びを感じてもらえるか？ 台詞を通したコミュニケーションはどこまで可能か？ 与えられた言葉でイメージをどこまで広げられるか？ などなど…毎回の試みはスタッフの発見の旅でもあった。そして核心は「遊ぶこと！」。合唱もダンスも演技も、そもそも稽古始めのストレッチ（体ほぐし）から「遊び」に徹した。「遊びまくる体と心」を表現にしていけるのだ。

もう一つ。私は障がいのある子どもを育てる親の思いを観客にさらしてほしかった。とはいえ、舞台上の本音は語りづらい。親の“思い”を集め、自分ではなく他人の書いた“本音”を語りや歌やドラマにしていた。この試みはその後数回続いて、その役割を終えた。

何ととっても初めての挑戦。演じる側も観る側も緊張と不安がみなぎって、ガタガタ震える子もいれば興奮を抑えきれない子もいる。稽古場では毎回何かが起こった。協力出演してくれていたアフリカンパーカショナーのＢＢ・モフランに聞いた。「皆に“だいじょうぶ！”って言いたいんだけど、スワヒリ語では何と言う？」。彼は答えた、「ハクナマタタ！」。

それを実践してくれたのが、ボランティアサポーターとして参加してくれた 20～30 名ほどの大学生たちだった。彼らはチャレンジドさん（出演者をそう呼んでいる）の健康と安全を見守り、不安を受け取り、またともに出演して大いに楽しみもした。この若者たちの何人かは後に「いちぶんネット」の働き手となって戻ってきている。そして、この言葉は「チャレミュー」の看板曲となり、「いちぶんネット」が運営する放課後等デイサービスの愛称ともなって生き残っていく。

チャレンジド・ミュージカル劇団 JAMBO! 誕生

「チャレミュー」は 10 年ほど毎年 1 回の公演を重ねていったが、私は元々劇作・演出を生業としており、そろそろ老体に疲れを感じ出す一方で、劇団市川座を結成してもう少し芝居づくりにこだわりたい事情もあって、2015 年からは 2 年に一度の開催に変更した。「いちみュー」と「チャレミュー」の隔年開催なら何とか責任とれると見込んだのだ。ところが「もっとやりたい！」の声が猛然と広がり、仕方なく「サークルで適当に遊ばせておけばいいか！」と考えて「チャレンジド・ミュージカル劇団 JAMBO!」を結成。これが大誤算だった。県内各地のイベントから呼ばれて年に 10 回ほどの出前公演あり、たまには大きな公演も打たねばならないとなり、また「チャレミュー」もあり、で返って大忙しとなった。

2024年3月、劇団JAMBO! 結成10周年記念公演を開催した。

コロナ禍で活動を中断されていた欲求不満も爆発して、楽しいステージとなった。これまで上演した作品の中から評判を呼んだシーンを選抜してオムニバス・ミュージカルとした。ラストシーンはラベル作の「ボレロ」15分間のダンスに挑戦。これまで何度か挑戦してきた作品で観客の評価も高く、我々も意気に感じているものだが、出演するチャレンジたちの表情もこのシーンばかりはいつもとは違う。どこか滑稽なほどの緊張感をはらみ出すからおかしい。



▲「ボレロ」 「TUWANZE! ～さあ行こう!～」より 2017年

舞台表現に取り組むチャレンジたちの一番の手掛かりはやはり音楽だろう。

特にリズムだ。まずリズムを身体全体で感じることで、これから創り上げようとする表現の方向性を感じ取る。やはりハイテンポなリズムの方が好まれる。表情が輝き出す。スローなリズムは動きもやや慎重になる。内心を探っていこうとする気配が見える。これにメロデーや歌詞を付け加えていくことで、多くの手掛かりを得て表現の方向性が固まっていく。いたずらに台詞や説明のための言葉を先行してはチャレンジたちの創造性は発揮されないのを痛感する。理屈からではない。身体から出発するのだ。

という風に、チャレンジさんたちとは何だかんだで25年近いお付き合い。初演当時、可愛い小学生だった彼らも今や30代から40代。何人かは亡くなり、途中から顔を見せなくなった人たちへの思い、「今頃どうしているのだろうか?」との思いに耽ることもあるが、それを言い出したら切りがない。現在劇団JAMBO!の劇団員はその辞めていかなかった人たち50名ほどが残っている。この秋からは、来年2月に上演される「チャレンジ・ミュージカル」第15回公演に向けた稽古に入っていくことになる

“遊び心”でつながる広がり

彼らはいがい高校を卒業した後で働き出す。企業に就職する人もいれば作業所で集団労働に励む人たちもいる。働く現場を覗く機会はないが、無理解や蔑視などと直面して大変だろうなという想像はつく。そういう連中のために、いちぶんネットが所有する「スペースにわにわ」で、働く障がい青年のための交流場「いるんおるん」を開設したのは10年ほど前だった。毎月2回の夕刻、1回500円の参加費を握りしめて10人ほどの青年たちがやってくる。集団ゲームをしたりカラオケに興じたりするうちに、時には悩み事相談をスタッフに打ち明けたり、仲間同士の語り合いに発展したりしている。

いちぶんネットが運営している放課後等デイサービス「ハクナマタタ」には中高生限定の定員10名が利用してくれている。特徴はやはり芸術文化活動だ。ダンスや歌や演劇のワークショップあり、茶道教室あり、の楽しい活動が評判を呼んで順調に運営されている。その運営主任は「チャレミュー」のボランティアスタッフ時の体験が忘れられずに、それを仕事に選んだ男だ。「楽しくて仕方がない」と笑顔が絶え



▲「サバンナ！～昔、ジャッカルは黄金の毛皮を誇っていた～」 2010 年

ない。給料が低いという不満も絶えないが。

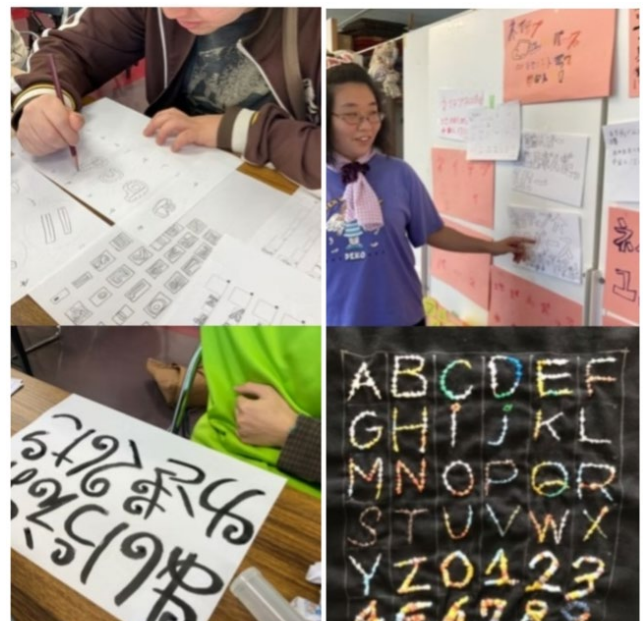
今年 2025 年 2 月、「いちぶんネット」は市中パレード「“ごたまぜ”ミュージカル・パレード&パフォーマンス」なるものに挑戦した(実行委員会事務局)。

市内にあるショッピングセンター「コルトンプラザ」と共催して、子どもだろうが大人だろうが、個人だろうが集団だろうが、日本人だろうが、障が

いがあるがなかろうが、とにかくみんな一緒に“ごたまぜ”になって、共生文化の花咲く街づくりに挑戦しようという“遊び”だ。300 名ほどが集まって冬の寒い一日をプラザ内外をパレードし、またパフォーマンスを披露した。単純な“遊び心”だったが、買い物客を即興的に巻き込んで妙に楽しい一日となった。もちろん劇団 JAMBO! も楽しんだ。来年も実施予定だ。

8 月には、障がいのある人たちが描いた文字や絵を専門家デザイナーが関わって売り出す「イチカワフォント & パターン」の売り出しイベントを実施した。全国に広がる「ご当地フォント」と連携した動きだ。おそらく今後広がっていく活動となるだろう。

などなど、「チャレミュー」や劇団 JAMBO! で社会参加の味を占めたチャレンジドさんたちが、次々と起きる活動にもどんどん羽を伸ばして、知らなかった人たちと仲良くなって、街中に出しゃばり出ていく始末だ。



▲イチカワフォント & パターン制作現場

活力の中心にミュージカル

その活力の中心にミュージカルがある。

公演前の本格稽古は毎週休日の 10 時から昼食休憩を挟んで 16 時まで。疲れを知らぬ稽古を重ねて 6 時間がアッという間に過ぎてしまう。終わり！といってもまだやっている。何というエネルギーだろうと呆れるばかりだ。“大好き！”という感情がこれだけのエネルギーを生み出すのだろう。



▲「サファリ！～旅に出よう！～」 2009 年

誰しも生きることは大変。嫌になることもいっぱい。障がいがあろうがなかろうが皆同じだ。だからこそ、何か一つでも“大好き！”というものを見つけて育てていってほしい。“大好き！”でつながる関係ほど幸せなことはない。そこで得られる達成感と自己肯定感は半端ではないからだ。年老いた私も彼らのエネルギーに引っ張られながら、何とかついていきたいと願っている。



▲「歌舞伎迷作面白双六」 2017 年

私たち自身がどこか「この範囲で」という自己規制に甘んじている。規制に慣れて本当の“遊び”ではなくなっていくのはつらい。実を言えばついこの前まで、そうした人たちの人生を丸ごと包み込む「ユニバーサルアート・タウン」構想を夢見てたのではないかと我が老いを恥じらうのだ。

それはともかく、これからもまた、“大好き！”でつながる“遊び心”を存分に楽しんでいきたい。

最近、「韓国ソウルで公演して市民と楽しく交流するツアー2027」を実現しようという企画が動き出している。長い間望んでいた企画なのだが、やはり相当の経費が掛かるのに気づいて躊躇する本音もある。だが、これも“遊び心”だ。面白がって取り組んでみようかと思っている。本音を言えば、この25年、障がいのある人たちとの文化活動に取り組んできて、活動の進展にも人間的成長にも「この範囲だろうな」という限界を感じるのだ。「障がい者の達成感や自己肯定感の獲得」というスローガンは私たちもよく使うのだが、